

「貧幸」って？ ——終戦直後の食糧不足と飽食社会と——

8月のNHKテレビ番組「富良野塾の演劇」（倉本聡）には考えさせられるものがありました。テーマは「貧幸」。第二次大戦のとき東南アジアで亡くなった英霊が舞台上に現れ、生き残っていた妻聞く。「日本は幸福になったかい？」。彼女は申し訳なさそうに返事をした。「豊かにはな



たけれど、人々の心は貧しくなったわ」。舞台の他の場面では、子どもたちがお互いに見える距離にいるというのに、携帯電話で話し合う異常さを演じている。面と向かっての会話が苦手なのだという。

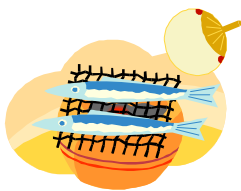
「祖国のために」と命を捨てたのに、60数年ぶりに見たその祖国は、なんとも得体の知れない社会になっていた。敗戦から世界第2位という経済大国となりモノは豊かになった。でも「人々の心は貧しくなった」という。うなずけるような現今の世情。「貧しくても昔の方が心が豊かだった」と共感するのは私一人ではないでしょう。



以下は60数年前の終戦直後の私の思い出です。

——最大の課題は食糧不足だった。生家（長野県）では畑の雑草やサツマイモの弦も5センチくらいに切って干したものを味噌汁の具とした。町に1軒だけある肉屋に農家が買いに行くことはめったなかった。村のお祭りや記念日に家で飼っているウサギや鶏をつぶした。蛙やシマヘビまで食した。それらが唯一の動物性蛋白だった。

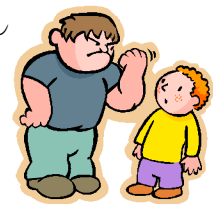
海のない県で新鮮な魚が手に入るわけではなく、魚屋の店先にハエのたかっている魚か、週に一度オート三輪車でくる行商から（たぶん店で売れ残った）魚を買った。チリン、チリンと学校の用務員さんが鳴らしていたようなハンドベルの音が聞こえると魚屋の来訪。8人家族の大



所帯だった我が家では、月に1度くらいサンマを買い、1匹を3等(人)分にした。夏は自分たちが近くの川で捕ってきた魚とか、冬には寒風の吹きすさぶ天竜川の浅瀬で川虫を採りそれを佃煮状に煮付けた。

実家は養蚕が生業だったので糸を取った後の蚕のさなぎを炒って食べた。蜂の子（蜂の卵・幼虫）は最高のごちそうだった。家の軒下や木の枝に蜂の巣を見つけては竹竿でつつき落としたりした。秋になると、稲の刈り入れ作業をしながらイナゴを採り甘露煮風にしたりした。今は“ゲテモノ”食いななんて言われてもいるが・・・。

ほとんどが家族全員の作業による自給自足。子どもたちは、手作りの遊び道具で、つぎのあったズボンやシャツを着、外で暗くなるまで遊びに明け暮れていた。「塾」なんてなかったし、ガキ大将はいても陰鬱なイジメなんて考えも及ばなかった。まさに「貧」そのものだったが、それでも仲間には希望があり、今になって思えば「幸」せだったような気がする。



終戦直後の舞台の話に引きずられて、過去の追憶のようになってしまいました。でも同世代の方々には共感いただける部分があるのではないのでしょうか。

心の豊かさとは自身の精神的充足感や生きがい、また他人の幸せをも思いやる心だと思います。終戦後、経済の発展に主眼を置いてきた日本と、モノの豊かさとおカネが幸せの象徴と信じてきた一部の日本人も、経済の壁が見えてきた、また地球の環境問題に取り組んでいかなければならない今こそ、これまでの“進歩信仰”とモノの豊かさに重きを置いた生き方を振り返ってみるときでしょう。問題解決の基軸には、私は高い宗教の精神性が必要だと思っています。



子供を食うテレビ・・・「飽食社会」と「貧幸」と——本当の人間の幸せとは何か考えるきっかけになればと思い話題を提供した次第です。